障害者の自立生活情報　No.６８
（２０２１年１１月号）

ナビゲーション

navigation

自立への道案内

ＮＰＯ法人自立生活センター・リアライズ　山本　啓司さんにインタビューさせていただきました

もくじ

●シリーズ　いろんなテーマの「なぜ」を解消！
～山本　啓司さんに聞く
なぜ施設はなくならないのか　なくしていくために必要なことは～……　2
●シリーズ　～Sevenメッセージ～障害者自立生活センター・スクラム　姜　博久さん……10
●おすすめのお店紹介します～relax　salon　Ｏｈａｎａ～（散髪屋）……13
●編集後記……16

シリーズ　いろんなテーマの「なぜ」を解消！

～なぜ、施設は作られ、なくならないのか
なくしていくために必要なことは？～

このコーナーでは教育、施設、交通など各分野に詳しい人にインタビューをしていき、当時の障害者や制度の状況、その制度はどう変わってきたのか？今、取り組んでいること、これからの課題はなにか、など語ってもらうというコーナーです。前回に引き続き『なぜ施設は作られ、なくならないのか　なくしていくために必要なことは？』ということで今回は、大阪府泉大津市のＮＰＯ法人自立生活センター・リアライズ　生活介護パイオニアの管理者をされている山本啓司さんに「施設を辞め、なぜ自立生活センターで働こうと思ったのか？」「自立生活センターで働き始めて変わったこと」「なぜ施設はなくならないのか」などお話をうかがいました。

＜プロフィール＞
山本　啓司（37歳）
特定非営利活動法人自立生活センター・リアライズ
生活介護パイオニア　管理者
活動歴　14年目
趣味　音楽、映画、お酒

～ビジョンは、なかった～

山下：今日は、よろしくお願いします。前回から施設をテーマにお話を聞いて聞かせていただいています。今回は、大阪府泉大津市で活動されています自立生活センター・リアライズの山本さんにお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

山本：よろしくお願いいたします。

山下：リアライズで活動する前は、どんなことをされていましたか？

山本：大学を卒業して、1年に満たないんですけども、高齢者の特別養護老人ホームで仕事をしていました。施設入所の人に対する介護をしていました。実習で関わった人たちの印象が良かったので、そこに決めたんです。頭の中には僕も就職先としては、特別養護老人ホームが大きかったですね。福祉の業界でもお給料もそこそこあるし、惹かれたのは。正味そのへんですね。

山下：生きていくためにお金は大事ですからね。地域の人にむけて支援という考えには至らなかったんですね。

山本：もともとは、地域で生活する高齢者を支え

るために相談する社会福祉士になりたかったというのもあるし、直接、介護とかではなくて、相談支援的なことをやっていきたいと思ってたんですけども、特別養護老人ホームの中でも相談をしている人達って、ごく一部やし、まずは介護からという感じで、施設長に言われて、頑張ってみますみたいな感じでやっていたと思います。

山下：当時、施設で働いていた様子を教えてもらえますか？どんな気持ちで働いていたのかも合わせて教えてください。

山本：入所されている方の身体介護などいろんな介護をしていました。ぶっちゃけ、なんか働き始めて半年ぐらい経ってからなんか違うなって思い始めたんです。いろんな要素あると思うんですけど、人間関係が悪いという部分もあったし。

山下：職員同士の人間関係が悪いということですか？

山本：そうですね。施設という中で頑張っている施設やったんかなと思うんですけど、現実は頑張ってても出来るのは限られていて、よくいうご飯が終わったらトイレの前に行列が出来るというのを普通に見てきてた。

山下：よくある施設の状況ですね。

山本：50床ぐらいあったんかな、利用者も同じぐらいおって、深夜帯は職員2人なので、けっこうハードでしたね。

山下：50人も一人でサポートできないですよね。

山本：そうなんですよ。だから、ちょっと待ってというフレーズが、あんまりよくないよというけど、絶対言わなあかんので、1日10回は言っていたと思います。

山下：そういうところに、しんどくなってきたということですね。

山本：自分の頭の中ではこういう風に、この人とは関わっていきたいし、介護したいなと思っているし、現実全然出来ないというところに自分の葛藤が大きくなってきました。福祉とか学んでこういうのを支援したいなと、人のために生きていきたいなと、この人の人生支えていきたいなと思う人やったらこの葛藤ってぶつかると思うんです。そういう思いを持つ人も、徐々に自分の身の置かれている状況に慣れてしまっている人が大半やと思います。自分もこのままいったら慣れていくんやろなと思いました。慣れていくって自分の価値観を変えていくというか、大事にしたいものを消していくイメージがあったから、これ慣れていっていいんかなみたいなものが、自分に思ってた時期がありました。ちょうど、半年ぐらい経ってからかなぁ。最初の頃は、自分のことを考える暇がなかったんです。ある一定、仕事を覚えて、自分でこれやれていけるわってなったら、これやってるけど、この時間の使い方ってるんかなと思い始めてきたんです。

～自分に嘘をついて生きてきた～

山下：施設で働いてたら、こういうもんなんや。トイレ行列できたりとか風呂介護、異性介護とか、当たり前に、これが普通なんやっていうことですよね。今、施設辞められて、自立生活センターで働こうと思ったきっかけは何ですか？

山本：リアライズで働こうと思ったきっかけなん

ですが、三井さんに誘われたんですね。いろいろ話したんですが、覚えている言葉がいくつかあって、やり取りとしては「今やっている仕事どうなん？」と。僕は、けっこう施設の中でも、いろいろ葛藤とか、どうにかなれへんのかなと思いながらも、やっていました。良いイメージを持ってやっていました。「けっこう良い施設やと思うよと言うたり。」「じゃ、ひろしは、歳とったらその施設入る？」と聞かれたんですけど「僕は入らへん。」と答えたんです。反射的に。俺入らへんいうたなと。「入らへんということは良い施設じゃないよな。」と言われて、そうやなぁと思って。それが、大きなきっかけやったんです。

山下：三井さんに言われなかったら気づけなかったところなんですかね。

山本：自分はなんでそこは嫌やって言うたかというと、トイレの時間やお風呂の時間、起きる時間、寝る時間決まってる。こんな拘束された生活は嫌だ。と思ったんです。施設で暮らしてるのを見て、全部良くないと思いました。良い部分は全く見えなくなりましたね。三井さんとそんな話をしてから。今まで施設で働いてて「良いよ。良いよ。」と言うてきたけど、ここで働き始めて、いっさいそういうことを言わなくなりましたね。

山下：180度変わりましたね。人に与える言葉の力ってすごいですね。

山本：今でこそ、自立生活している障害者がまわりにたくさんいますけど、そういう人たちの生活を見てなかったから、あれが普通やったけど。普通じゃなかったと感じましたね。絶対に、ここにはもどらへんなと思いましたね。ちょっと格好いい言い方をすると自分に嘘をついて生きてきた感じはしますね。自分が感じたことを率直に言えるし、自分の気持ちを大切にしてくれる仲間がたくさんいてるし、今は、あんまり自分の気持ちをぼかして仕事はしてないけど、施設で働いていた頃はぼかしまくっていた。自分はこう思うけど、出来へんから諦めようとか抑え込もうとか。

ＮＰＯ法人自立生活センター
リアライズ設立集会

～三井さんのおかげで～

山下：なかなか、職員同士お互い話すること悩みを話することがなかったんですかね。相模原事件もそうですけど、植松被告が考えこんでしまって事件を起こしたんかなと思いました。なかなか、仕事はしんどいけど、こういうもんなんやと、頑張らなあかんやみたいなものがあって、相談が出来ないから、そういう事件とか起きるんかなと。

山本：あると思います。そこをだから、相談する人はいなかったし、忙しすぎるというのはありますね。僕の友達で施設で働いている人おるけども、自立生活を支えてることを伝えても「そんな状況ってあるん？」と言われたこともありました。

山下：そういう意味では、三井さんに初めて自立生活のことを教えてもらって、目から鱗だったんじゃないんですか？そんなんあり得へんやろと。

山本：やっぱり思ってましたね。介護が必要で制度とか使って在宅で生活している人って高齢者は家族が介護してる人が多いと思うんですけど、高齢者分野の人は特に分かれへんと思いますね。自分は三井さんが誘ってくれたから今、ここにおると思うんですけど、同じような誘い方をしたら、全員きたかというとそうでもないと思うし、いろいろあると思います。僕はそれを選んだだけで、でも、やっぱり、今考えた時に、施設って介護とか相談支援とか、利用者とトラブル対応についての研修は力を入れてすると思うんですが、地域で自立生活している人のこういう生活もあるんやよという研修は圧倒的に少ないんなと思いますね。

山下：障害者の生活もあるんだよと施設の人も知っていける機会があれば良いと思いますね。

山本：僕も相談しなかったのは施設の中で、これからの自分の人生を選ぶという土台がなく、選べる土台がないところから話するので、施設の中での話で完結するんですね。みんな、その世界にどっぷり浸かっていて、施設の中でしゃべったとしても施設の中での介護の話でしかならないんです。

～施設での経験は無駄ではなかった～

山下：その人の人生とか、こういう選択肢もあるよなというふうにならないんですね。

山本：そうですね。ならないから話しても仕方がないみたいな。話しても面白くないと思ってましたね。無駄な時間やなと。一応暗黙で禁止されてたんやけど、飲み会で、利用者の話になって、こういう介護は嫌やとか。でも盛り上がるからそういう話になるんですよね。でもそういう話は不毛やなと時間がもったいないなと。逆にストレス溜まるだけやん。それを解消出来る方法を一緒に考えないと、よくないと思ってましたね。綺麗ごとですけど思ってました。大学の時の友達とは話しやすいのは、みんな大学で福祉のことを学んできて、いろんなことで悩んで、自分は福祉の現場に関わっていきたいかと話をしてきたから、土台が揃っているという感じがしました。施設は、閉鎖空間はやっぱりあるなと職員だけじゃなくて、当事者もそうやし、変なうっぷんみたいなのがあって。爆発したから相模原事件みたいなことが起こるんやろなと。こういう生活のやり方があるとか、では、それにむけて自分たちはどう支援していこうかとか、ちゃんと話する土台が出来てあったらちょっと変わってたのかもしれんなとは思いますね。

山下：施設で働いている人は自分の生活がかかっているから、施設で働いていきたいと思っていると思うから、働いている人に問題がるんではなくて、施設のシステムに問題にあるということですかね。

山本：僕からしたら、ほぼそれですね。100％に近いぐらいでそうだと思います。施設で暮らしている人も地域で暮らしたらいいやんとすごく思うんですけど、そこに行きつかない人もたくさんいますよね。もどかしい

というか、ちゃんと伝える方法って、自分が持っておかないとダメやなと思いますね。施設で働いていた頃は、地域移行この人できるんちゃうかと思うこと自体を知らなかったし、地域移行の選択肢がなかったです。でも自分が施設で働いてたことは無駄とは思ってないです。良かったなと思います。

山下：それは、どんなところですか？

山本：施設での経験がなかったら、地域での生活がベースになってしまうからそれが当たり前やんと。今やっている地域生活が全員出来るかというとそうではなくて、やっぱり施設を選ばざるを得ない人とか選んだ先にこういう状況になるんやなと。前の経験があるからこそイメージ出来るし、そのイメージは自分が今やっているモチベーションに関係していて、自分の関わっている人が施設に行くとなると、その時のイメージがあるから「施設はアカンよ。」言える。

山下：経験がなかったら本気で言えないですよね。

山本：施設でやっていた頃に戻りたくない、誰も戻したくないというモチベーションがあるから、出来てると思います。施設経験者に聞くことで自分のモチベーションを維持するとか、こういうことをやっていきたいという確認するという意味もあると思います。経験者に聞けば聞くほど施設ってアカンとしか思えなくなりました。

障害者運動初参加

～やりがいがポイントだと思います～

山下：リアライズで地域移行を取り組んでいきたいという話はしますか？

山本：時々ですが、やっています。パイオニアでメンバー増やしていきたいと思っていて、地域移行をしていく人を増やしていきたいなという話をしています。地域移行を１つの活動として、メンバーが訪問していきたいですね。でも、パイオニアのメンバーであっても、どうして僕たちは施設から地域移行ということを促していきたいんかということを知らない当事者もたくさんいます。ずっと地域で生活している人たちやったら、施設の縛られ感を知らないから、別に一つの生き方として施設があってもいいじゃないかと思います。当事者がみんな、同じ温度で施設がアカンというのは決着つけへんと思います。施設反対という感じにはなれへんのかなと。仕方ないと思う。その中を体験してきて、やっぱり嫌やでと言えるけど、知らんかったら介護が安定している。やっぱり施設いるんちゃうんと言う人もいてると思う。その時に、施設経験者が話をすることが大切だと思います。

山下：健常者スタッフの中でも、山本さんのように施設で働いた経験をして自立生活センターで働き始める人と、いきなり自立生活センターで働き始める人の違いとか感じたりしますか？

山本：大学卒業してすぐにリアライズに来る人もいれば、大学卒業して施設で働いて、辞めてリアライズに来る人もいてます。その人の進む道なので、どっちが良いとか悪いとかというわけではないけど、施設を経験し

ている人は親近感が湧きますね。同じ経験をしているんでね。辞める理由はいろいろあるけど。介護のやりがいって難しいと思うんですよ。介護にやりがいを見出すのはけっこう難しいと思っていて、ルーティーンワークが多いじゃないですか。ずっと続けるのも大変やなと思っていて。モチベーションを保つためにどうしていくのかリアライズで話をすることがあるんですけど、リアライズに関われる動きとか運動への関りとか、介護以外で関われてると実感を持てたらいいんやけど、僕の中でやりがいがポイントやと思っていて、やりがいをもってやっている人は、良い介護もするし良い相談支援もするし。僕自身はやりがいを持てているのは、施設の経験があったからかな。気づけるポイントがいっぱいあったと思います。

パイオニアの障害者と一緒にランチ

～正義と悪のぶつかり合い～

山下：リアライズで活動を始めて何年目ですか？

山本：リアライズで働き始めたのは２３歳の時。１３年目です。リアライズで働こうと思ったのは勢いです。福祉って働き口たくさんあるなと。もしアカンかったとしても、他に行けるところがあるんちゃうかと。リアライズをみて楽しそうやからというのはありましたね。自分たちでやるってどんなことかなと。楽しいこととか人と違うことをやりたいと常に思ってしまう人間なんですよ。そこにリアライズがマッチした感じですかね。

山下：交通はホーム柵が設置されたり、教育の問題だとインクルーシブ教育といわれてきたりしてきてて、少しずつですが、バリアフリーやインクルーシブな社会が進んできたなと実感するんですけど、施設は、進んだ！と実感として少ない感じがしますが、どう思いますか？

山本：正義のぶつかり合いやと思います。味方でも敵でも味方からみたら正義やし、敵から見たら正義やしそれぞれ否定しようのない正義ってあるなと。自立生活運動でもあると思っていて、リアライズを守っていきたい続けていきたい、その方向に行っているやけど、別の方向が２つ出てきて、どっちも正しいと思っているからぶつかり合うんですよね。でも、どっちもリアライズを守っていく。という考え方は一緒。意見は違うけども方向性は同じところを向いているということですかね。施設の話でいうたら、施設も地域も、どっちも障害者を守りたい。障害者を排除しようとは思っていないんですよね。障害者の命を大切にしたいと思っている。そこは、意見が一致している。

山下：方法が違ったり、命の守り方が違うんですかね。命は守るけど、人生はなんでもええんかと。そこは違うやろと。命を守るというところが、別に敵対しているわけではなくてという感じでしょうか。

山本：実は一緒のことを考えて、リアライズも施設もどっちも自分の障害者の命を守るという正義を貫いてるんですね。曲げようとせずに。というのんかなと今ぼんやり思って。例えばホーム柵やったら、なかったら死ぬわけじゃないですか。どこからどう見ても悪なんですよね。それは成立しやすいなと。設置しなくていいという正義はそこには存在しないんです。施設は障害者の生活を守るということについてはものすごい一生懸命。それが、なくなれへん原因かなと思います。

地域のお祭りに出店しました！

～感性を育てていける場に～

山下：これからどんな活動をしていきたいですか？

山本：自立生活センターの面白さって、それぞれあると思うのですが、利用者、職員という関係の枠に収まってしまうような福祉の現場にしたくないなと。働いている健常者だけじゃなくて、当事者も利用者感覚を持っている人も多いと思う。リアライズも当事者も健常者も楽しんだり苦しんだり一緒にやっていく場だとおもうんですけど、どっちが上とか下かとか関係なく障害者も健常者もフェアに支え合い、活動していく場というのを目指していきたい。どうしてもほかの事業所とか、一般的にある社会で育ってきたら、障害者を守ることが美徳であったり、そこに甘えてしまう当事者もいてると思う。そこに頼る当事者もおって、最初は仕方ないけど、障害者と健常者一緒になってやっていくということじゃないんですね。フェアじゃなかったら、ただの福祉事業所の枠にはまっていくし、人の関係の作り方としておもしろくなさそうですね。そういう感性を育てていける場になればいいと思います。当事者も人に伝えることをしたらいいと思うし、健常者も。リアライズでこういうことをやっていきたいというのを持って、目標を持っていかないと喧嘩になるだけやし。やっていくためにどうしていこうかと土壌を作っていくことが大切やと思います。

今年、パイオニアのメンバーが2名増えました！

～施設は終着ではない通過点～

山下：最後に質問させていただきたいと思いますが、どうして、施設とかなくならへんのか、なくしていくために当事者はどんな活動をしていったらいいか。

山本：繰り返しになるかもしれませんが、正義と正義の戦いやと思います。どっちかが悪にならないとなくならへんと思います。自分たちが出来ることって地域で生活できるんやとロールモデルを増やしていくことやと思います。施設で生活している人って諦めている人が多いと思うので、モデルが少なすぎると思います。職員にとっても障害者にとっても。だから地域で生活していることを見てもらうことが大切だと思います。いろんなことと関わることが大切なのかな。差別や偏見って今の社会で生きてたら満ち溢れているし、僕自身も気づかへんけども、障害者に対して差別してきたこともあるし、当事者と出会ってこれって差別やったんやなと気づくと、意識が変わると当事者への見え方も変わってくるし、見え方も変われば当事者の生活あり方もの見えてくると思います。少しずつ地域の人に知ってもらう必要があるんかなと。施設の利用者を減らしていく。社会の意識を変えていく。受け皿は地域にある。施設の中の研修は、やってると思うんやけど、施設のクオリティを高める研修をしていると思うけど、その人の人生をどう考えるかということはやってないと思う。施設が終着ではなくて、通過地点だと思うので。施設での研修とかアプローチ出来ていけたらいいなと。地域移行を積極的にしている施設が増えたらいいなと思いますね。

山下：施設の障害者や職員にとっても当事者がやっている施設取り組みのことを、知ってもらって地域でも暮らしていけるということを知ってもらえたらと思いますね。今日はありがとうございました。

山本：ありがとうございました。

～～～Seven メッセージ～～～

【プロフィール】

・名前：姜 博久

・所属：特定非営利活動法人障害者自立生活センター・スクラム

・今の仕事は何年目：１８年目

・大正区障がい者基幹相談支援センター管理者＋相談支援専門員

・障害者運動に関わるきっかけ

堺養護学校時代の同級生が全国障害者解放連絡会議（全障連）関西ブロックの会員として活動していたツテで、大学卒業後のアルバトとして全障連の大阪での全国大会運営のお手伝いをしたこと。全障連の存在は詳しくは知りませんでしたが、養護学校在籍時に、全障連の前身組織のメンバーであった楠 敏雄さんたちが、堺養護学校の事務員だった障害者の支援に学校に乗り込んできた際、教員から「怖い連中が来るから職員室には近づくな」と注意されたエピソードを思い出しました。実際に関わってからは、天皇が来阪したときなど、覆面パトカーが全障連の事務所をよく見張っていたこともあったし、中曽根内閣時の臨時教育審議会の大阪公聴会で障害児の普通学校入学を求める誓願書を委員に手渡そうとして警察に妨害されたうえ、ビラ配りの際には機動隊の車両から写真を嫌というほど撮られたことなどがありました。１９９０年代には全障連関西ブロックの事務局スタッフとして全障連の取り組みや障大連の部会や全体会などに参加するようになりました。

公開 学習会での司会

・なぜ、教育や人権問題を取り組んでいるのか（きっかけ・こだわり）

全障連や障大連では労働課題や教育課題、優生思想に関係する課題に関わってきました。それぞれ、わからないこと、知らないことだらけで、会議で議論される中身を理解していくことからはじまりました。それなりに理解することができると、各課題から見えてくる制度や社会の価値観に対してもおかしなことだらけであることがわかってきました。

もともと障害児教育については、自分自身が養護学校中学部卒業後に入学した地域の普通高校で、同級生との関係や障害者だからと特別視されていたしんどい経験があったので、社会に出て苦労させられる状態を障害者にもたらす養護学校なんていらんし、あったらあかんと感じていました。また、

養護学校が必要な子どもたちがいるという専門家や親の考えが理解できませんでした。そこには、人を分けるという考えがあって、それにはどうしても納得できないからです。人をどこかで区別することはできないはずなのに、専門家や親は、特別なことは特別なところでと子どもたちを分けようとします。それが合理的配慮とか愛情だと勘違いしている。

国連の権利条約の策定前にＤＰＩ日本会議の事務所で特別支援教育推進派の大学教員の方と話し合ったことがあります。そのときも、「姜さんみたいな人はいいけど、やっぱり養護学校が必要な人はいるんですよ」とその専門家から言われたときには内心ブチ切れました。権利条約のための建設的な議論の場だったので声を荒げることは控えましたが、「こういう専門家がいるから僕らは勝手に分けられるんや」と改めて感じたことを思い出します。

人を能力というわけのわからない物差しで分けてしまう社会の価値観は簡単に変わりそうにありません。多様な性の問題にしても、子どもを産まない選択が当たり前にできない状況も、障害のあるなしやその可能性があるかないかで生まれてくることが選ばれる出生前診断の問題も、人に線を引いてしまうという社会のあり方を問うている問題だと思います。そレに対してはおかしいと言いつづけたいと思っています。

・障害者運動の面白いところ

障害者運動の面白いところは、この社会のおかしいところがよくわかるところです。そもそも人間のカラダは実は同じじゃないのに、みんな同じだと思い込んでいます。人間は二本足で歩くという常識は僕たち障害者には通用しません。歩けたら歩けたで別にいいんですが、二本足で歩けない世界も当たり前にあるというのが僕たちの世界です。パラリンピックなどで驚いてもらっては困るというものです。世の中の当たり前が当たり前ではないと、そう言える世界は面白いです。

パラリンピックの三段跳びの義足をつけた選手のひとりは、義足歩行をするために進んで両足の膝下を切断することを選んだと言います。その理由は義足をつけても自分で歩けるからだったそうです。どう思いますか。義足をつけるために足を切断したことをすごいと思いますか。それとも、車椅子よりも、やっぱり歩けたほうがよかったのねと、ちょっと考えちゃいますか。

障害者運動の面白いところはカラダのことだけではありません。訴えつづけて行動をつづけていれば、世界とそこでの生活は変わることを実感できることです。バリアフリーの課題も福祉制度の内容も、僕が運動に足を踏み入れた頃からするとずいぶんと変わったと実感します。僕たちの先輩たちが生活を賭けて挑んできた社会を変える取り組みが受け継がれ、いまの状況をつくり出してきたし、そこに少しは参加できたことは光栄に思っています。その感覚を次につないでい

駅頭で仲間たちとカンパ活動

くことが、これから僕が果たすべき役割だと思っていますし、まだまだ感じつづけていきたいことです。

・障害者運動をしていく中でモチベーションの保ち方

次につないでいくことが一つのモチベーションになっていますが、スクラムの活動の中で、また相談支援の仕事の中で、現実に人が変わるということの難しさを感じてきましたが、若いスタッフに支えられて、自分自身が変わってきたことも実感してきたので、これからも人の変わっていくのと、自分もさらに変わっていくこともモチベーションには、なっているように思います。

それから、年を経てカラダが少しずつ、あるいは急激に変わっていくことに戸惑いながらも、カラダの不思議さをどことなく面白いと感じているところもあります。その変化も一種のモチベーションになっているように思います。

・在日韓国人であり障害者ということでの生き辛さ

在日外国人としての、とくにコリアンとしての、生きづらさは、余り感じたことはないです。ただ、在日コリアンであり障害者でもあることの複合的な差別については１＋１ではなくて、それぞれの中に互いを差別してしまっていることの問題があると感じていました。詳しくは、別に書いた文章があるので（「複合差別は、単純ではない―障害者＋在日の間か、内か」『部落解放』７５３号）、それを読んでください。

あと将来的な不安ですが、日本でも、そのうちに外国人への排斥運動が起こる可能性があるとも感じています。ヘイトクライムに関する法律もできましたし、市民の差別に対する意識も高まっているので、そんなに心配することもないかもしれないのですが、災害や国際的な環境の変化で差別が増幅することも意識しながら、外国人も安心して暮らせる取り組みは必要だし、障害者運動の中でも、かつてナチスドイツで障害者安楽死作戦の延長としてユダヤ人のホロコーストがあったことを忘れず、ほかの人権問題への関心を高めていく必要かあると思います。

・社会に障害者のことを伝えていく中で大切にしていること、取り組んでいくべきこと

社会に障害者のことを伝えていく中で大切にしていることは、まず丁寧に向き合うということだと思います。相手が障害者のことをわかっていないと思っても、そこは当たり前くらいにとらえて、何を伝えたいかを丁寧に言葉にして伝えていくことが大切だと感じています。相手にも考えてもらわないと一緒に問題解決はできないので、相手が何を知らなくてわかってもらえてないのか、相手にも何が問題なのかをわかってもらわないと次に進めないので、そこは丁寧に進めたいところです。障大連の交渉でも、よく府や市の担当者が問題だと認識してもらえているのかを問いかけていきますが、まずは、そこが出発点だと思います。

・座右の銘

揺れて、戸惑いながら、じっくり丁寧に向き合う

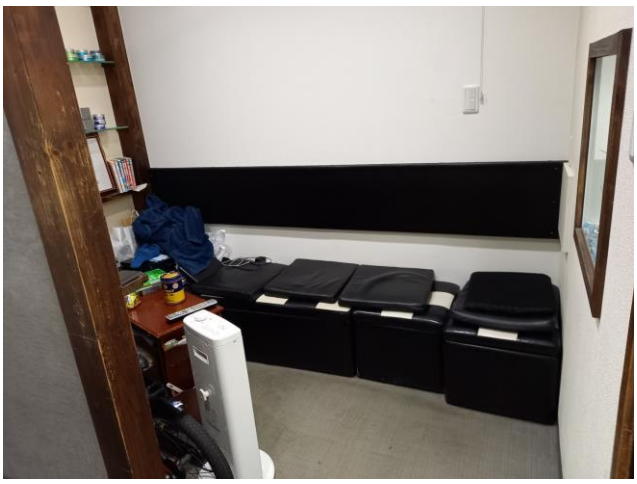
おすすめのお店紹介します！

調査者　：手動車いすユーザー1名
調査場所　：relax　salon　Ｏｈａｎａ
住　所　：〒546-0042　大阪府大阪市東住吉区西今川4-23-12
営業時間　：火曜日～金曜日12:00～23:00　土曜日・日曜日・祝日：8:30～23:00
定休日　：月曜日
電話番号　：06-6705-3345
アクセス　：大阪メトロ谷町線駒川中野駅から東へ信号2つ目

今回は、車いすに乗ったままカットと洗髪してもらえるお店を紹介したいと思います。
お店の名前の由来は、Ｏｈａｎａは、ハワイ語で家族。孫からおじいちゃんおばちゃんまで来てもらえるようにという意味でつけたそうです。

【オーナーさんのお話】
両親と一緒に働いています。
16歳で専門学校卒業し、卒業後、6年間は、色んなお店(散髪屋さん)で働いていて、22歳の時、散髪屋さんに就職。就職したお店が、車いすのままカットやシャンプー出来るようになってたり、ボランティアで老人ホームや住之江区の知的障害者施設に訪問し散髪していました。
32歳の時、自分のお店を立ち上げた。老人ホームへの出張散髪へは、今も行っています。

はじめは、お店の入り口に2段の段差があったが、スロープに変えた。
入口は手動扉になっています。



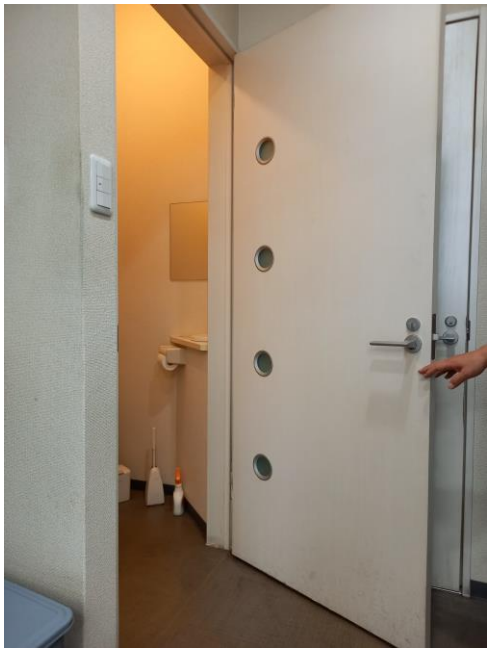
待合室もあり便利になっています。

店内が広いので車いすでの移動も、ゆったりできます。

車いすのままカットとシャンプーが出来る洗面台は1台設置されています。

車いすの高さと洗面台の高さが合わなかったら台などを使って調整するとのことでした。

顔剃りを希望される方は、お店の都合上、専用の椅子に移乗してほしいとオーナーさんが言っておられました。



店内に広めのトイレも設置されていました。手すりもついてます。

家族仲良くされていて、雰囲気も良いお店です。

みなさんも、ぜひ行ってみてください！

編集後記

みなさん、こんにちは。朝晩、だいぶ寒くなってきましたが、体調など崩していませんか？新型コロナウイルスの感染者数も、減少傾向にありますが、これからは、インフルエンザも流行ってきそうです。気を緩めずしっかり感染対策をして冬を乗り切りましょう。さて、今回のナビゲーションはいかがでしたか？自立生活センター・リアライズの山本さんに施設で働いていた頃のこと、自立生活センターで働き始めたことなど話していただきました。施設をなくしていくために何をしていく必要があるのか改めて考えさせられました。これからも、私たち障害当事者が声を挙げていける活動をしていきたいと思います。　（やました）

●各団体で企画しているものがあれば、当センターが発行している機関誌ナビゲーションに掲載してみませんか？ナビゲーションは 3月、7月、11月に発行しています。掲載する際、各企画のお問い合わせは当センターではなく、直接、各団体にお願いいたします。当センターにお問い合わせいただきましても、お答えいたしかねますので、ご了承ください。

●みなさんからのご意見、ご感想をお待ちしております。記事に対するご感想、日ごろ感じておられる疑問、こんな情報を知ってるよなど、なんでも結構ですので下記の連絡先までお寄せいただければ幸いです。また、突然、取材にお伺いさせていただき、ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、その際には、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-▽-▽

自立生活センター・ナビとは…

☆私たちの考える「自立」は…

働いてお金を稼ぐ事や身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でしょうか？もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えられないときには仲間にサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」であり、色々な方法でお手伝いしていきたいと考えています。

☆地域で障害者の自立を実現していくための「道案内（ナビゲーター）」として、例えば「介護してくれる人を探しているんだけど？」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの？」そして「自立したいけど自分には無理かな？」自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出かけたり仲間と一緒に料理を作ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っています。

△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽

発行　自立生活センター・ナビ　　でんわ　06（6760）2671
住所　〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8　　ファックス 06（6760）2672